

---

# 盗み屋

ヨシノ和巴

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

盗み屋

### 【Nコード】

N1732C

### 【作者名】

ヨシノ和巴

### 【あらすじ】

和風ファンタジーラノベ。馬鹿で大人な青年と賢く幼い少年の、切ない御話。正しくなくても生きていたいから。過ちをおかしても、けして汚れはしない。今日も小さな通りの片隅で二人は暮らす。

## 序

からん、ころん。

からん、ころん。

下駄の音が夜の通りに響く。

薄ぼんやりとした手元の光に照らされているのは五十前後の痩せた男。

短く切り揃えられた髪には、まばらに白髪が混じっていた。

男は不安げに辺りを見回しながら、ゆっくりと通りを進んでいく。

そうして、通りの中程まで進んだ処にある小さな一軒の家の前で足をとめた。

灯りとは逆の手に持った皺くちゃの紙と家とを交互に見比べ、男は躊躇いがちに戸を叩いた。

## 壹

少年は、黒のぴったりとした衣服を身につけ、その上にゆったりとした丈の短い着物を着ていた。

丸みを帯びた袴のような服の下には、やはり黒のぴったりとした布地がその姿を見え隠れさせている。

顔立ちは整っているといつていいだろう。

瞳や鼻という全ての部分がちょうどよい案配に配置され、中性的な雰囲気醸し出している。

伏せられた黒目がちの瞳と不機嫌そうに結ばれた唇は若干生意気そうな印象を与えるが、それはそれで魅力的であった。

少年は、肩の少し上で切られた黒い髪を気だるげにかきあげ、小さく欠伸をしながら分厚い書物の頁をめくった。

少年の名は奏、歳は十五。

こん、こん。

躊躇うように小さく、戸が叩かれた。

「椎名さん、お客」

奏は本から視線を上げず、部屋の隅で猫と戯れている青年、椎名に声をかけた。

「へいへい、わかってるよ。ったく、たまにはお前も動けつての」  
猫を放し、ぼさぼさの頭に手をやりながら立ち上がった椎名は、小さく溜息をつく。

此方は二十代前半といった所だろうか。

紺の着物を袖を通さず羽織り、中の着物は少しばかり着崩している。服の上からでも適度に締まった体つきが見て取れ、身のこなしもどことなくきびきびとしている。

派手ではないが、控えめに整った容姿をしていた。

「何言ってるんですか、客の相手は貴方がすると決めてあるでしょう」

奏は顔をあげ、じろりと睨めつける。

椎名は小さく舌を出し、肩をすくめた。

「うわ、こえー顔」

ふざけて言いながら戸を開ける。

外には五十がらみの男が立っていた。

「はいよ、今晚は。どういった御依頼ですかね、旦那さん」

椎名は手招きをし、男を中へと入れた。

まばらに白髪の混じった頭や顔に刻み込まれた皺に似合わず、男の動作ひとつひとつには年寄り臭さを感じられない。

ただ、ひどく不安そうに落ち着かない様子で、おどおどと怯えた目をしていた。

「あの、此処は本当に何でも……その、盗んでいただけなのですかね？」

確かめるように男は問う。

椎名はにっこりと人の良さそうな笑みを浮かべた。

「それは勿論、報酬さえいただければ。それが俺たちの職業ですから」

「ただし、実体のあるもの……人が触れられるもの、に限りませうれどね」

奏は重そうな書物を閉じて、傍らに置く。座ったまま、男へ視線を向けた。

「用件をどうぞ、お客様」

男は小さく頷いて、懐から巻物を取り出した。

こほんと小さく咳をして真っ直ぐ奏を見つめる。

「依頼主は私ではありません。私は、私の主でありこの国の領主であられる、西須敏風様の命で此処へ参りました」

奏は眉をひそめた。

立ち上がり、巻物を受け取ってすりと紐解いた。

上等の紙は艶々として、先程の男の言葉が本当であることを裏付けている。

奏はそれを一瞥すると微かに首を振り、溜息をついた。

「……くっだらない」

「奏、客目の前にいんだぞ」

椎名は小さな声で咎めるように言った。

貴重な客の、しかもそこら辺に転がっている小金持ちどころじゃあない、久々の「当たり」である客の機嫌を損ねるようなことをされては困るのだ。

食費やら何やら、生きていくのに必要な生活費を稼ぐのにこつちが  
どれだけ苦労してると思ってたんだ、この餓鬼。

椎名はそう心の中で悪態をつきながら奏の手元にある巻物をのぞく。  
何度か紙の上に視線を走らせて、顔をあげた。

「盗むのは相守の国の姫様、ですか」

「ええ。相守治寿様の第二子、朱野の姫君を誘拐していただきたい  
のです」

相守の国は此処、西須の国の北隣の大国である。

十何年程前に小競り合いはあったものの、今では相守と西須は和解  
しているんじゃないか、と椎名は訝しんだ。

否、それよりも、戦を仕掛けるつもりなら跡継ぎでもない女子を誘  
拐する意味がわからない。

まさか娶るつもりか？

けれど向こうの姫様はまだ五つかそこらだったはず。

それに西須様は愛妻家で奥方様をたいそう大事にしておられるそう  
だし、相守に縁談を申し込んだとか断られたとかいう話も聞かない  
し。

ああでもないこうでもない、と椎名は考えを巡らせていたが、冷や  
やかな声がそれを遮った。

「その依頼はお断りします」

「おい、お前何勝手に」

断ってたんだ、と続けられるはずだった言葉は喉の奥で詰まる。

奏はあからさまな嫌悪を顔に浮かべ、男を睨みつけていた。

「戦が起こったらどうするつもりなんですか」

奏の周囲の空気がびきん、と音をたてて凍り付いた。

薄い氷の膜に囲まれているようなぞわぞわとした寒気が椎名をおそ  
う。

どうも怒らせたらしい。

これだから、餓鬼は嫌なんだ。

「そんなことは有り得ません。貴方がたが失敗でもして捕まらない限りこの秘密が向こうに漏れることはないのですから。貴方がたは大変腕がいいという話でしたが？」

男は奏の視線をさらりと受け流し淡々と言葉を返す。

先程のおどとした態度はどこへやら、人間というのは自分の後ろに権力者がいると相手に話すことで随分と性格が変わってしまうらしい。

それともあれは演技だったのか。

どちらにしろ奏の神経を逆撫でしたことに変わりはないようだ。眉間の皺が深くなっている。

椎名は二人に気付かれぬよう小さな溜息をついて数歩退いた。

触らぬ神に祟りなし、関わらないのが1番いい。

今は黙って傍観者に徹するのみ。

椎名は腕組みをして柱にもたれ掛かった。

「馬鹿なこと言わないで下さい。秘密が漏れるはずがない？ そんなこと、何でわかるんです？ だいたい僕は……国の争いごと巻き込まれるのは、もう沢山だ」

奏は絞り出すように言葉を紡いでいく。

固く握られた拳が小刻みに震えていた。



「では依頼を受けては下さらないと？」

如何にも好々爺然とした表情で、男はわらう。

奏は肯いて、ぴしゃりと言い放った。

「ええ。そして出来れば今すぐお引き取りいただきたいのですが」  
奏が戸を指し示すと、男はくつくつと笑い声をあげた。

厭な嘲笑い方だ。聞いていて不愉快な、がさついた老人の嘲笑い声。  
無意識に椎名はしかめ面をした。

「おやおや、自分の立場がわかっておられないようですね。自国の領主からの依頼を断るなんて。しかしまあ、いいでしょう。何もこの国であなた方だけがこそ泥をしているわけでもない、他に代わりは幾らでもいるのでね。あなた方より腕は劣るでしょうが、そんなもの私には関係がない。こちらとしては戦になったとて構わないのですから。けれどあなた方には此処から出て行ってもらわなければなりませんまい。此処は本来空き家の筈。そうでしょう？」

そうだ、その通りだ。全くもって。

此処はずっと空き家だったさ。

少なくとも書類上は。

俺の親父が国に申告なしで勝手に住み始めちゃったんだから。  
くそじじい、あの野郎覚えてろ。

椎名は心の中で悪態をついた。

「……………卑怯者……………」

吐き出すようにして奏が呟く。

そうさ、断れるわけがない。

無理なんだ、あいつには。

椎名は目を閉じた。

しょうがないだろ、奏。

生活がかかってる。

この仕事は金になる。

お前の気持ちが変わらないわけじゃない。

でも俺の気持ちだってわかるだろ？

金が必要なだ。家も、食べ物も、ときには国の庇護だって必要になる。国に守ってもらうには、国の言うことかかねえと。

世界を遮断して、椎名は心の中でそう呟いた。

「卑怯？ あなた方のやっていることは違法なのですよ、それを取り締まるのに卑怯も何もないでしょう。勿論それなりの働きをして貰えば此方も土地を差し上げる位はしますけれども、それも嫌だと仰られてはね」

慇懃無礼にそう言った男は、戸の方へと歩き出した。

一歩、

二歩、

三歩、

「引き受けさせて、いただきます」

奏がようやく口を開いた。

小さな、けれどしっかりとした口調。

顔を上げ、真正面から男を見た。

「ではまだ打ち合わせが必要ですねあ」

男はにやりと笑う。

椎名はゆっくりと、柱にもたれていた体を浮かした。

さあ、ようやく始まりだ。

嫌々だろうが、一度受けた依頼に手を抜くような真似はしない。  
仕事をしていく上で決めた一番大事な決まり事。

盗み屋の本領発揮と行こうじゃないか。

結局男がその小さな家から出てきたのは、夜も明けようかという時分だった。

淡色に染められた空は、段々と明度を増していく。

通りにまだ人の気配はなく、数時間前と同じように、男の下駄の音だけがからんころん、からんころん、と響いていた。

「僕は納得した訳じゃないですからね」

奏は下を向きながら呟いた。

男 相上室正が帰ってから数十分ばかり経つが、今に至るまで奏は一度も顔を上げていなかった。

俯いたまま、ふてくされた表情で畳の上に座り込んでいる。

無理もない、と椎名は思った。

戦のせいで住む場所も親も人間であることすらも奪われた奏に、一歩間違えば戦のきっかけになりうるような仕事をさせるのは確かに酷だった。

椎名はぼんやりと、丸くなって座り込んでいる奏と、昔の奏の姿を重ねた。

十一年前、二人が初めて会ったあの日、奏は荒んだ眼をした、まるで人とは思えないけどものだった。

奏は言葉を発することもなく、周りを警戒するように常に小さく唸っていた。

小さな体を逆立てるようにして辺りを見回していたあの姿が、幼い椎名にはどれほど怖かったことか。

父親に、何故あんなけだものを拾ってきたのだ、と訊いたこともあ

った。

今では、あれは奏があ頃、人でなくなるような過酷な生活をしていた証なのだと分かるのだけれど、まだ幼かったあ頃の椎名にそれを分かれと言うのも、また無理な話だった。

普段はおくびにも出さないが、あ頃のこととはまだ奏の中で昇華しきつてはいない。

夜中にうなされて、顔も覚えてはいないだろう母親を呼んでいることも少なくなかった。

全て知っていて、それでも椎名はこの依頼を断ることが出来なかった。

此処を追い出されたら、二人、いや三人には、帰る場所がなくなってしまう。

椎名はそれだけは避けたかった。

椎名自身にも帰る場所が必要だったが、数年間帰ってきていない行方知れずの父親が帰ってきたとき、もし此処に家がなかったら、それはもう二度と会えないということになりはしないだろうか。

この国は決して狭くないし、大体今父親がこの国に住んでいるのかすら分からない状況で、偶然出会う確率など無いに等しいのではないだろうか。

そう考えると椎名はこの家を明け渡すことが出来なかった。

それに、もし父親と二度と会えなくなるとしたら、それは奏にとっても喜ばしいとは到底言えないのだ。

奏は父親に懐いていたし、父親も奏のことを大層可愛がっていた。父親と椎名が同じことをしたとしても、奏が文句を言うのは椎名だけだったし、奏と椎名が同じことをしたとしても、父親が文句を言うのは椎名だけだった。

何だか理不尽だと思いなから、だからといって別段不満を感じるこ

ともなく、毎日面白おかしく暮らしていた。

父親が消えたあの日までは。

それはあまりに突然で、何故家を出たか、理由も思い当たらなくて、父親について知らないことがありすぎて、見つけることも出来なかった。

きっと椎名独りだったら堪えられなかっただろう。それは間違いない。

奏がいたから、椎名は今までやってこれたのだ。守らなきゃいけなかったから。

椎名にとって奏は弟で、奏にとって椎名は兄で。兄は弟を守るものだから。

父親がいなくなったなら、父親にだってなってやろうと思った。

でも無理だった。椎名では父親になどなれなくて、椎名には何も出来なくて、だけどせめて父親が帰ってくるまでは、奏を守らなくてはいけないと思っていた。

それなのに、今、自分は何をやっている？

守るべきなのに、傷つけた。

親父なら、こんなときどうしただろう。ふと、そう思った。「情けない顔しないで下さい」

さっきまで座り込んで俯いていたはずの奏は、椎名の足を軽く蹴飛ばした。

「……んな顔してねーよ」

「意地っ張り」

奏の口振りにどこか面白そうな雰囲気を感じて、椎名は憮然とした。

「うるせえ、だいたいさっきまで沈みきってたお前に言われたかな  
い」

額を軽く弾こうとすると、奏はそれを避けて笑った。

「じゃあ、おあいこです」

そういうことか。

椎名は苦笑した。

そういう不器用な励まし方をするから、椎名はいつも奏を怒れなくなる。

情けないと思いつながら、椎名はいつものように怒れなくなった。

今椎名が奏の為に出来る最善は、依頼を成功させてそれなりに穏やかな日常を取り戻すこと。

何としてでも成功させなければ、と椎名は心に誓った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1732c/>

---

盗み屋

2010年10月20日16時16分発行